

PRESS NEWS

大学出版会からの本の思い出に寄せて

加藤 富美子
音楽・演劇講座

大変残念なことに、これまで東京学芸大学出版会にほとんど関わりをもつことがないまま、間もなく東京学芸大学とお別れします。そこで、せめてもと、これからの東京学芸大学出版会へのエールを、自身の大学出版会からの本の思い出に寄せながらしたためさせていただくことにしました。

思い起こしてみると、私はこれまでどれだけ多くの大学の大学出版会の刊行物にお世話になってきたことでしょうか。民族音楽学を学びはじめた頃にバイブルのように携えていたW.P.マルム『東洋民族の音楽』（1971）は東海大学出版会から出された訳書でした。表紙の色や図柄を今でも鮮明に思い出すことができるほど、強く印象に残っている本です。また、大学院時代から沖縄音楽研究に向かった私は、法政大学沖縄文化研究所ならびに法政大学出版局から出された本に沖縄や奄美の文化研究のいろはを学びました。そして、音楽教育研究の立場からは、シリーズ『学びと文化』など東京学芸大学出版会刊行の教育学関係の本に今でもとても多くを頼っています。



かなしくて、うれしい
教育現場の再発見
合計七万三千日。子どもたち
と向きあった10人の先生か
ら教師の生き方、学校の風景
が浮かび上がってきます。
四六判 232頁 1600円
+税 ISBN
978-4-901665-15-5

こうして並べてみて気づくことがあります。いずれも、繰り返し繰り返し手にとってきた本ばかりだという点です。きっとそれは、大学出版会から出される書籍は、採算を無視して、著者や編者がどうしても伝えたいと考えた珠玉の内容をもつものだからなのでしょう。

これまで10年間の間に東京学芸大学出版会から刊行されてきた本についてはどうでしょうか。まったく同じことが言えると思います。いずれも、今どうしても伝えたいこと、どうしても残しておきたいことがギッシリと詰まっています。

それに加えて特に気づくのは、教育実践の具体的な事実を明らかにする貴重な記録が多いという点です。『子どもたちとの七万三千日——教師の生き方と学校の風景——』、『東日本大震災と東京学芸大学』などがその最たる例としてあげられるでしょう。また、各科教科教育から教師教育まで、そして学校から地域まで、幅広い分野にわたりこれからの教育のための具体的な提案が多くなされているのも大きな特徴でしょう。

こうした特色をこれからも大いに生かしていただき、私が手にしてきた大学出版会から出された書籍がそうであったように、読者に繰り返し繰り返し手にとってもらえるような本を、これからもたくさん刊行してくださることを心から祈っています。

本書は、東京学芸大学そして附属学校の危機対応の記録、教職員と学生、児童生徒の行動、そして子どもたちに活かすべき教育、リスク社会のなかでの学びを、50余名の執筆者によって書き上げたものである。大震災からの復興をこれからの教育につなげ、息の長い取り組みをしてゆくため、東京学芸大学がその使命を世に問う。

A5判 288頁 1700円+税
ISBN 978-4-901665-32-2



小学校教師に何が必要か

——コンピテンシーをデータから考える

書 評

「これからの小学校教師になる若者に、敢えて「予定調和」を期待することが、来たるべき教育課題の変化に対して絶えず自己改善を図っていくコンピテンシーを確保し、教育の充実につながっていくのではないか。」(P.141)

教えられたことを、自分の内部において統合する。そして、限界の先を主体的に学び取っていく。そのような「予定調和」が期待できる学部生に、教員養成教育で身に付けさせるべきコンピテンシーとは、一体何であるのか。小学校教師に求められる資質能力を、量的データに基づき、これほど明瞭に指摘した書籍は未だかつて存在しなかったのではないだろうか。実に7年もの歳月を費やし、教職課程学生・小学校長・初任教員約7,000名を対象に調査し解析をした本書は、激しく変革が求められる時代の波に晒される教師教育カリキュラム開発に、一筋の光を差し込むことになるだろう。

しかし、精鋭たる教師教育研究者による広く世に問う研究であるからこそ、現職の小学校教師がこの本を読み解き、あえて若干のクリティカルなコメントを述べたい。

まずは、当初実施される筈であった「小学校に子どもが通う保護者」が調査対象から外されたことである。これは助成金の打ち切りが原因ではあるが、諸教育機関・教育関係者の求める資質能力と、保護者の求める資質能力が必ずしも一致しないことは、経験則のみならずいくつかの先行研究からも明らかであり、その視点を組み込めなかったことは残念だった。

さらに、その解析が巧みであるからこそ、質問紙項目の柱立てに再考の余地があることも否めない。教師のセンス・オブ・ワンダー^①≒感性・感覚に関する部分、情意的な側面が、

意図的に切り取られているのではないかと拝察せざるを得ない。

これらに近い考え方としては、「教師」を「それぞれの社会・文化的背景のなかで「教えること (TEACH)」以外に、後進を導く人格的モデルとしての期待も含意している」と本書の中で論じ、続けてこうした人格面に関わる「実践的指導力」は、(中略)客観的・科学的な指標としてしめすのが困難であり、それゆえその「実践的指導力」の判断において主観に頼る部分が多くならざるを得ない」と結んでいる (P.39)。

ここで着目したいのが、小学校長インタビュー調査による質的分析である (P.103)。

5つのクラスターの代表的な記述内容が記されているのだが、その全てから、人間性や子どもに“入(い)り込む”(筆者の造語)ことなど、教師としての「センス」の必要性を、小学校長が期待していることを読み取ることができる。

ともあれ先に述べたように、膨大な年月とデータとを活用したこの精鋭たる研究プロジェクトだからこそ、論理的にも実証的にも開拓が進んでいない領域にも鋭く切り込むことができたのではなかろうか。その意味で、本書に有用性を見出さない者は皆無であろう。

この「小学校教師に何が必要か」を論じた本書は、教師教育研究が今いかなる局面にあるのかを極めて如実に物語っている、まさに“MONUMENTAL WORK”であると見えよう。

大熊 一滋 (本学教職大学院・現職教員)



岩田 康之・別惣 淳二・諏訪 英広 編

A5 判 172 頁

定価 [本体 1800 円+税]

ISBN 978-4-901665-33-9

大熊 一滋氏の書評に答えて

本書の基となった共同研究を進めている間、われわれのやっていることが実際に小学校で働いている先生方にどう受け取られるか、ずっと気になっていた。今回、本学の教職大学院に学ぶ現職教員・大熊 一滋氏の書評をいただいて、われわれの問題関心が「通じた」ことへの安堵とともに、やっぱりこの共同研究を本にまとめてよかった、という思いがわき上がってきた。元気づける書評をくださった大熊氏にまず感謝したい。

その上で、大熊氏のご指摘の 2 点については、いずれもわれわれの採った研究手法の不十分さゆえのものとして、謙虚に受け止めたいと思う。

個人的なことになるが、この共同研究をやっていた時期は長男が公立小学校に通っていた 6 年間とほぼ重なっており、保護者たちと仲間づきあいをする中で同時並行的に私は「小学校教師に何が必要か」のデータ分析を考え続けてきたのである。実際、小学生の保護者たちが「よい先生」を評価する視点は、「校区の店で買い物をしてくれる」だったり、「中学入試の問題を取り上げてくれる」だったり、「気持ちのいい挨拶をしてくれる」だったり、様々である。そして「えこひいきをしない」と「うちの子の事情に合わせてくれる」のように、時として相反する。これらをくみ取って、教職課程の学生・初任教員・校長たちの意識調査とつなげていく方法論を、われわれは探しあぐねた、というのが実情である。終章で触れた「学校制度に関する保護者アンケート」（内閣府規制改革・民間開放推進会議・2005 年）のサンプリングや質問項目の設定に強い違和を覚えつつも、それに対して保護者一般の素の意識をすくい取って示すことができなかつたことは今なお悔やまれる。

「教師のセンス・オブ・ワンダー≒感性・感覚に頼る部分、情意的な側面」については、われわれは校長の意識調査の自由記述についてのテキストマイニング（書評の論旨に直接影響するものではないが、ご指摘の P.103 はここを指していると思われる）と、インタビュー調査からこれを解析しようと試みたつもりである。ただ、前者についてはこの新しい研究手法にわれわれが不慣れであったこと、後者については調査に協力してくれた校長のサンプルが少なかつたことなどから、不十分さの譏りは免れまい。権力的に「アンケート」や「ヒアリング」を仕掛ければ、もっとサンプル自体は増えたのだろうが、それは対象者の素の意識とは言いがたい。このジレンマは、本書をお読みいただく中で大熊氏にもわかってもらえたのではないかと思う。

われわれにとって、この共同研究を通じて得たものは多い。今の教職課程学生や初任教員たちの意識と、われわれ大学で教師教育実践を行う者のそれとのギャップを思い知り、その上でなお、単にそうした学生や初任教員たちのニーズに応じることだけをもって解決策とせず、今後に向けて教育界にリクルートすべき若者のイメージを得るに至ったことは大きな収穫であった。その先の課題を、大熊氏を始めとする現職の先生方も含めて、これから考えていければ、と思う。

岩田 康之

新刊



国語の授業の基礎・基本

小学校国語科内容論

小学校でちゃんとした国語の授業をするためにどうしたらいいかわからない。そんな国語の苦手な人が何を教えればいいのか、そのために自分は何を知り、何を考えなければならぬか。国語の本質をわかりやすく解説します。

国語科コアカリキュラム研究プロジェクト 編

B5判 232頁 1600円+税

ISBN 978-4-901665-34-6

近刊

学校社会の中のジェンダー

教師たちのエスノメソドロジー

木村 育恵

A5判 240頁 2300円+税

ISBN 978-4-901665-35-3

東京学芸大学出版会・事務局からのお知らせ

腰越 滋 理事・編集委員、兼事務局員

◎ 会費をお支払い下さい

昨年度の売上収入は、約750万円でした。ただし利益率は2割前後程度ですので、純利益としては、64万円と、厳しい状況です。そのため会費収入の約52.4万円は、出版会にとって死活問題に関わる貴重な財源となっております。ただ、残念ながらこの会費収入も、納入率がよいとは言えず、予算僅少の中ギリギリの存続状況にあるというのが、現在の出版会の姿です。

このことをご理解いただき、会費のお支払いを是非に宜しくお願い申し上げます。新年度に入りましたら、郵便振込用紙と共に会費納入のお願い文書を、会員の皆さまには送らせて頂きたいと存じます。年会費は4,000円となっております。何卒よろしくお願い申し上げます。

※なお、誤解されている先生がいらっしゃるようですが、出版会の会員資格は学芸大学をお辞めになった後も継続いたします。会費をお支払いいただければ、在任の時とまったく変わらず本の出版も可能です。また、もし出版会からの退会をご希望される先生は（とても残念ですが）、事務局までご連絡下さい。

◎ 絵はがきをリニューアルいたします

何回か新しくして参りました本学の絵はがきを、この度リニューアルいたす運びとなりました。前事務局長の藤井健志副学長と佐藤正光事務局長が中心となり作業を進めて参りました。前回と同様、写真撮影は本学元事務職員の方の井上録郎氏にご依頼申し上げ、学内の様々な四季折々の風景写真、学生さん・教職員の写真などを素材としてご提供頂いております。これらを元に、選定・編集を進めさせて頂き、新年度には発売予定です。消費税を含む諸般の事情もあり、値下げは難しく、セット価格600

円と、バラ売りのものは1枚80円とさせて頂きたいと思っています。新年度に入りましたら、生協で販売予定ですので、何かの折にご使用賜れば幸いです。

詳細についてのお問い合わせは、東京学芸大学出版会事務局 [TEL] 042-329-7797 までお願い申し上げます。

◎ 「あったらいいな、こんな本！」本を出しませんか？ 出版企画持ち込みのお誘い

本学出版会では、会員には須く本を出版する権利があります。現会員は無論のこと、会員になられた暁には、ご自分の研究成果を著作物として出版する権利があるということです。勿論、ご出版のご意向と構想とを出版会に持ち込んで頂き、編集委員会での審議を経た上でのこととなりますが、企画には自由度がございます。ですので、ご専門の学術分野のご企画はもとより、セカンド・メジャーや時には趣味的な内容でも、場合によっては出版可能です。

また自費出版という方法も含めて考えますと、出版の垣根は一般の学術出版社よりも遥かに低いと言えましょう。周知のように、本学出版会の既刊行物を見てみますと、啓蒙的なブックレット系の本から、ハードカバーの本格的学術書など多岐にわたっております。

出版会事務局としても、「あったらいいな、こんな本！」企画として、内容を募集してみてもどうかという案が出つつあります。既会員の方はもとより、入会をご検討中の方におかれましては、本を出版できるというアドバンテージを是非ご活用賜りたくお願い申し上げます。出版会事務局からも、先生方の食指が動くような企画をご提案できるよう、新たな試みを戦略として掲げて参りたい所存でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学構内 [TEL]042-329-7797 [FAX]042-329-7798

[E-mail]upress@u-gakugei.ac.jp [HP]http://www.u-gakugei.ac.jp/~upress/

東京学芸大学出版会<会報>プレスニュース(第17号)2014年3月31日発行 編集:佐藤正光・腰越滋/レイアウト:生田 稚佳